

令和3年度 公立鳥取環境大学
一般選抜後期日程 試験問題

小 論 文
(経営学部 90分)

(注意事項)

1. 試験開始の指示があるまで問題を開けてはいけません。
2. 問題冊子は6ページ、解答用紙は2枚です。
3. すべての解答用紙の所定欄に氏名、受験番号を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子及び下書き用紙は持ち帰りなさい。

以下の課題文は、私立大学教員である井沢良智氏の著書『今どきの学生とあきらめない教育』の第1章および第2章から一部抜粋したものである。課題文を読み、つづく設問に答えなさい。

〈課題文〉

第1章

学校だけに特定できない問題の所在

2002年に完全学校5日制への移行を決めた学習指導要領は、「ゆとり教育」によって教育の成果を上げることをねらった。子どもに生活のゆとりをもたせると謳（うた）って教育の自由化を導入したが、その成果は意図にそって、学力低下をはじめとする混迷を招き、ゆとり教育の修正に踏み切らざるをえなくなった。教育の混迷、混乱を議論するさまざまな主張のなかで、問題は単に学校にあるのではなく、生活の仕方に関わる「生活力の低下」にあるとする指摘がある。たとえば、河上亮一氏はそれをこう述べている。

「(教育再生会議の) 提言は、最大の目的を学力の向上におき、授業時間を10%増やすことを提唱し、ゆとり教育の見直しをうたっている。しかし、最大の問題は学力低下なのだろうか」

「私は、現在の生徒たちの最大の問題は生活力低下であると考えている。生活の仕方をきちんと身につけず、嫌なこと難しいことにぶつかると簡単に参ってしまう生徒たちが増えている。ちょっとしたことで大きく傷つくようになった。他方、欲望をおさえることをしなくなり、他人といっしょに生活することが難しくなった。傷ついた時に、自分を守るために極めて暴力的になることもできた」

これは、学校だけに特定できない、生徒たちの生活形成に関わる社会、地域、職場、家庭、学校など、すべてが破綻の発生に関わっているという指摘である。こうした複合要因によって荒れる事態を報じるメディアの報道で、批判の矢面に立ちやすいのが、いぜん現場の学校であり、生徒個々をもっと掌握し、指導すべきなのにしない、できないと、「ダメな先生」の烙印を押しがちである。それに対して私たちも、メディアに同調してワンパターンの教師像を固定し、公正にまた冷静に問題の本質(下線部①)を探ろうとする努力を欠いている。

(中略)

第2章

学生の基礎学力の低下を私大教員はどうみているかー公式調査から

さて、主として私の私的な実感によりながら近年の学生たちの学力に関わる光景を述べてきた。ここで、私個人ではなく、大学のマジョリティーを占める日本の私立大学の教員たちは現場の学生との日常の接触のなかで、いわれるところの学力をいったいどう感じているのだろうか。実は、2万人をこえる教員の回答を集計した私立大学情報協会の『平成十九年度 私立大学教員の授業改善白書』が平成20年5月に発表され、その数字データが利用可能なので、ここで同白書を参照してみよう。

教員たちが授業で直面している問題点では、6項目に分けた質問のなかで、図1に示すように、最も多かったのが、56%余りが指摘した「基礎学力がない」である。次いで似通った質問である「学習意欲がない」を37%余りの回答者があげている。3年前の平成16年にも同じ調査が行われているが、前回同様、今回もいぜんとして「基礎学力」「学習意欲」が焦点の課題として1、2位を占めたわけである。短期大学では、基礎学力不足の問題は4年制大学以上に深刻で、7割近い教員によって指摘されている。4年制大学でも、理工系の「基礎学力がない」との指摘は同じく7割に近く、受験生の理工系離れと軌を一にして現場が強く感じていることを察知させる数字である。

こうした実態に対して、では、教員の側で具体的にはこれをどんな課題として捉えているのだろうか(図2参照)。授業で直面している問題点として指摘されたのは、目的意識が希薄な「学生への動機づけや学習意欲を高める工夫が難しい」で、48%を占めた。「授業技術の工夫」もそれに次ぐが、「学生とのコミュニケーションが難しい」と感じている教員も約15%いる。これは、文理、芸術など、分野によってそれほど違いのない数字である。

図1 授業で直面している問題点【学生に関する問題】

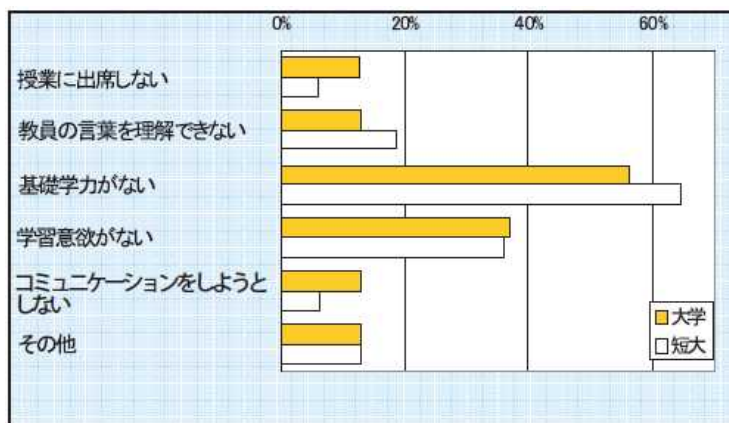
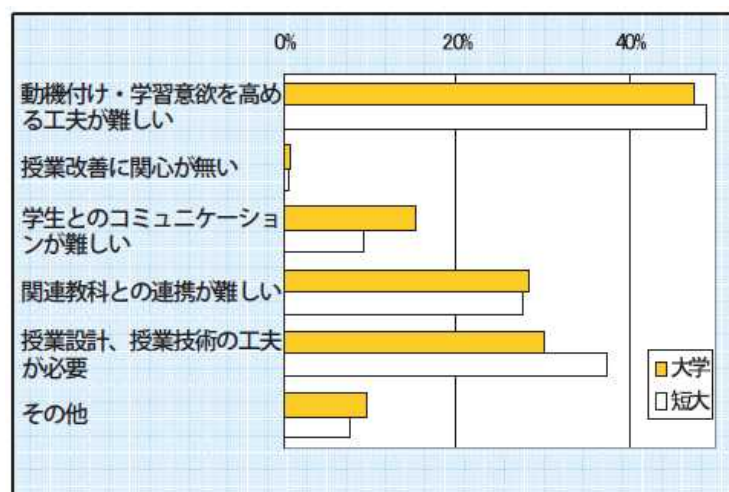


図2 授業で直面している問題点【教員に関する問題】



(中略)

生活力低下が学力低下の真因だとする指摘を深耕する

この「学力低下」よりも「生活力低下」を指摘する河上亮一氏によれば、「日本の学校は伝統的に、生活教育と教科教育の二本立てでやってきた。生活教育を基礎とし、クラスでの集団生活と行事を中心に、生徒たちに基本的な生活習慣や社会性（道徳性）を身につけさせてきた。そして、クラスが安定した上に教科教育（授業）を行ってきたのである」

近年生徒たちが変わるなかで、クラスの集団生活や行事になじまなくなっていて、生活教育は年々難しくなっているという。そこにさらに、「ゆとり教育」が導入され、時間数が減った授業のしわ寄せとして、行事を減らして授業にまわさざるをえなくなり、放課後の行事やクラブ活動の準備にも余裕が乏しくなり、満足に実施できなくなっている。生活教育が細ると、クラスの安定、落ち着きに果たしてきた役割も細って、この生活力の低下が結果として「学力低下」につながる。授業時間を増やしても、生活力をしっかりと身につけていない生徒たちには、「やる気のない、ダラーツとした雰囲気、騒然とした状態」が想像できると、河上氏はいう。

安定した運営の基礎ができていない地域や学校では、授業時間を増やすことも可能だろうが、それ以下の学校では、疲れ切った教師と、やる気のない生徒たちの中でトラブルが増え、混乱がますます拡大するのではないかと指摘する。

ともあれ、こうした小中学校から高校にも及ぶ生活力の低下が、近年の大学生の変化にも表れているのは当然の成り行きとあってよいだろう。ただ、この小中学校なり高校での変わりようは、以後さらにどう推移していくのであろうか。学力と生活力が絡み合った学生たちの変わり方に対処して多くの大学が取り組んでいるのは、長期に及ぶ学習と生活の過程で根づいた落ち着きのなさ、アキっぽい慣性を克服して、大学生として必要な基礎学力を修得させることである。

教育の現場では、こうした状態を変わりようがないものと決めつけ、あきらめることはしないし、してはならない。留年、退学が増えてもよしとするのでは、ことは簡単なのだが、私たちは「変わる」「変える」ことを目標にさまざまな試みをそれなりにしてきた。「学力が落ちた」だけでは、現場人としては済ませられないからである。

第1章で、現在のこうした破綻現象に、学校だけでなく、特定化が困難な要因が複合して関わっていることに触れた。そうした要因のなかでも、あらためて考えてみると、家庭との関係が、私たちの経験や判断の及ぶかぎり存外に深いと断言していいかもしれない。ただし、この関係性は広く深く複雑な絡みのなかで成立しており、地域性、収入、家族、学校、友人関係など、さまざまな視点から確認しなければ、理解がつかない。

家庭との結びつきは初中等教育とは違って、一見すると疎遠なものに見えるが、学生たちの進路、病気、サークル活動、成績次第では、連絡や調整をとり合うことがある。狭い専門以外では門外漢である私などには、不慣れな手続きなのだが、どうにか連絡をとり合い、家

庭訪問もした。いくつかの経験をし実際に成功も失敗もした。

(出典：井沢良智『今どきの学生とあきらめない教育―次代を引き継ぐ主役なればこそ―』
創成社新書、2009年を一部改変)

問1 下線部①の「問題の本質」とは何をさすと考えられるか。課題文で述べられている主張にしたがって、何が問題であるのか、そしてその本質が何であるのかを 80字～120字以内で説明しなさい。

問2 つぎの図3および図4は、平成28年度の『私立大学教員の授業改善白書』に掲載された調査結果である。課題文を参考にして、図3および図4についての説明文を 350字～450字以内で書きなさい。なお、図3および図4は、課題文にある平成19年度の調査と同じ趣旨の調査であり、図3は図1に、図4は図2に対応している。また、解答は「大学」についての説明文とし、「短期大学」については触れなくてよい。

図3 学生の学修に関する問題

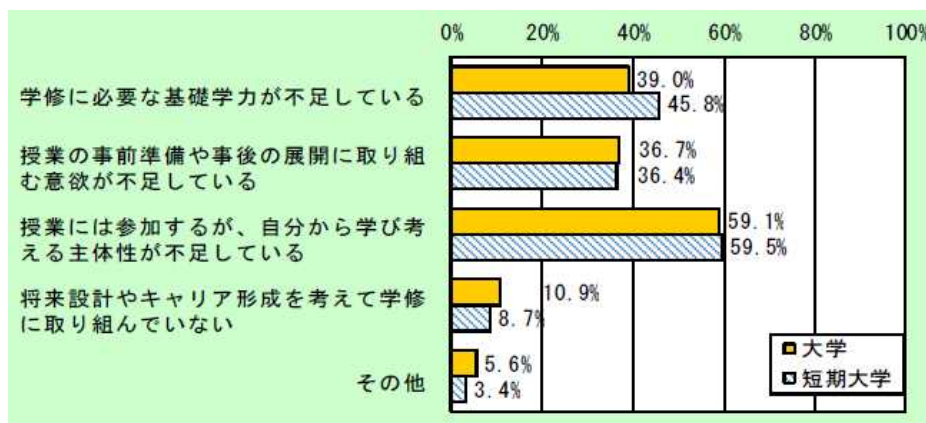
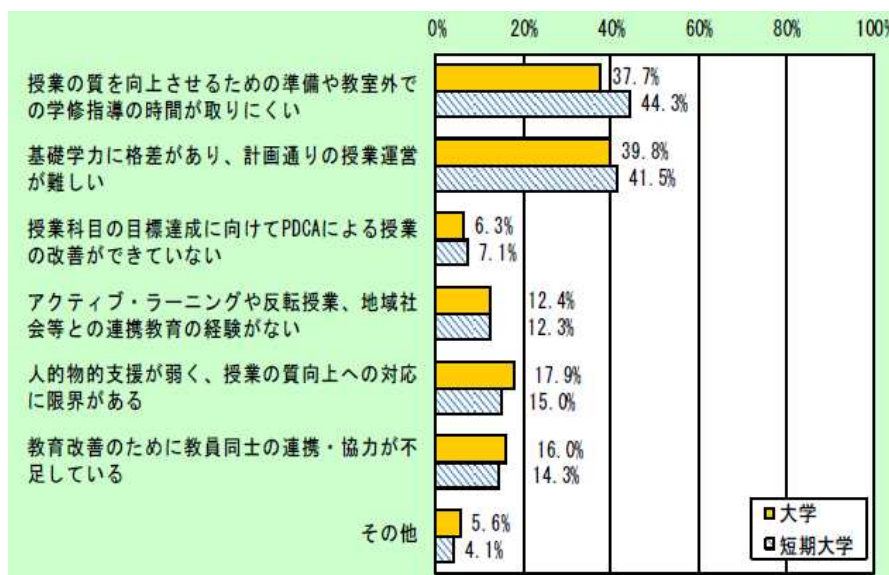


図4 教員に関する問題



(図3 および図4 の出典：公益社団法人私立大学情報教育協会『私立大学教員の授業改善白書』平成28年度(2017年5月))

問3 基礎学力の低下や主体性の欠如など、あなたは大学生の学修に関する問題をどのように認識し、それをどのように解決すべきであると考えてるか。大学生自身、大学教員、大学、家庭および社会など、いくつかの論点を取り上げ、それぞれにおいて必要と考えられる取り組みと、その相互のつながりにおける取り組みについて、あなたの考えを 500字～600字以内で書きなさい。